説教20211128イザヤ61：1-9aマルコ13：33-37「目を留めてください」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

さあ、今日からろうそくに火がともされ、アドベントの時に入りました。イエス様は私たちすべてに言われます。「目を覚ましていなさい」と。「目を覚ましていなさい」という御言葉は一体どういうことなのでしょう。イエス様は私たちにどうしろと言われているのでしょうか。このことを正確に理解して実践することはとても大切です。でも、私たちはよく黙想してこの御言葉をまず深く理解することが必要だと思われます。そうでないなら、例えば、熱心なクリスチャンがクリスマスに向けて極度に覚醒して、昼も夜も、寝る間を惜しんで活動し、かえって疲れ果ててしまい、鬱になってしまう、などと言ったことも起こりかねないからです。今、申し上げた事例で、この人が取った行動で悪かったのは、極度に覚醒し、寝る間を惜しんで活動してしまったということでしょう。実は聖書では、寝ている時間をとても大事な安息の時として重んじています。御存じのように旧約聖書では、幾多の夢の記事が記され、その夢を解き明かすということに重大な意味を見出しています。ヨセフもダニエルも夢の解き明かしを致しましたが、その夢というのは人間が寝ている間に観るものであります。又、神の僕として神の為に戦ったダビデは、「平和のうちに身を横たえ、わたしは眠ります。主よ、あなただけが、確かに　わたしをここに住まわせてくださるのです。」と歌っています。ダビデは、どうやって眠ったかと言うと、常に主なる神の御腕に抱かれて安らぎ、平和の裡に身を横たえたのでした。このように私たち人間は眠るという営みを決しておろそかには出来ないばかりか、眠りには重大な意味があると言わざるを得ないでしょう。

それで、結論から申し上げれば、イエス様が私たち全員に「目を覚ましていなさい」と勧告されているのは、つまり、私たちは夜、寝ている時も、昼、起きている時も、いつもイエス様のことを忘れずに、思っていなさいということです。

さて、私たちの父なる神は、見える者と見えない者との造り主であります。主なる神は、山や川や海、そして人間や動物や生き物などすべて人間に見えるものを造られましたし、また人間には見えないものも造られました。人間にはみえないものの中には天使や、悪魔も含まれます。主なる神は悪魔という悪い存在をも造られたのかと、言われるかも知れませんが、悪魔と言うのは堕落してしまった天使であり、主なる神の意図と反して存在するものです。そして悪魔は存在はするけれども、その存在は主なる神の支配の内にあって自由な振る舞いは出来なくされています。又、主なる神はレビヤタンという人間の目には見えず想像するしかない大きな怪物をも造られました。人間はレビヤタンのことをワニの様であるとかカバの様であるとか、色々と想像してその姿を描いて来ましたが、そのレビヤタンのことも、作り主である主なる神は、その体の各部から、その性格にいたるまで全てを知悉されているのです。

一体この世の中は、私たちの目に見える部分よりも、目に見えない部分の方がはるかに多いのではないのでしょうか。そして私たちの目に見えない部分を私たちはいろいろと想像したり又、予測をしたりして、それを出来るだけ見やすいように可視化しようと努めています。でも、皮肉なことにその可視化しようとする努力が、ますます見えない部分を増やしているようにも思えます。例えば、私たちは戦争が起こった時に自国が必ず勝てるようにするために、核兵器という地球をも破壊しうる強力な兵器を配備してしまいました。今や、ボタンを押すだけですべての人間の命が失われることは目に見えていますが、それゆえに私たちの将来はどうなるか分からないという見えない部分が増えてしまいました。又、新型コロナ渦という状況に対して、２，３の企業が独占的にワクチンを全ての人間に対して供給したことによって、かえって見える部分が少なくなり、見えない部分が大きくなってきたようです。私たちは、今、見えないことを撲滅しようとして躍起になり、かえって見えないことを増長させ、見えないことから逆襲をされているような状況にあるのではないでしょうか。

私たちは今一度、見えないことをも造られ、見えないことをも完全に支配されている主なる神のその御業への信頼を強くし、その御業に期待していく必要があります。そうしないと、私たちの目には見えない部分、例えば、私たちが死んだ後のことや、人々のいさかいごとのなれのはてのことなどは、全てタブー視されて、私たち人間はますます自分たちの目に見える部分にだけ固執して生きるようになり、主なる神の造られたまるごとの大きな世界からは切り離されていくようであります。

さて、この世の見えない部分を支配されている主なる神のことをよく知ることが出来るのは、夜という時間であります。一昔前まで、夜は本当の真っ暗闇でした。外の街灯も少なく微々たるもので、又、家の中の明かりも昔は電気代を節約するために必要最低限のともしびにしたのです。ですから、寝室と言うのは本当に真っ暗闇であり、見えない世界であり、それだけで恐ろしい思いをした方も多いのではないでしょうか。或いはそんな恐ろしさがあったからこそ、一昔前は、今のような一人暮らしではなく、家族が集まって住むスタイルを選んでいたのかもしれませんね。

ちょっと話がそれましたが、そのように一昔前は夜と言う世界は、真っ暗闇の世界、すなわち目には見えない世界だったのでした。その目には見えない世界に、作り主である主が下ってこられる、光のない世界に誠の光の子が下ってこられたのがクリスマスであります。このように、クリスマスの喜びには、真っ暗闇の恐れが前提されています。

今日読まれましたイザヤ書も、預言者イザヤが、夜の真っ暗闇の中で、語ったような言葉であります。イザヤは見えない世界を思い描きながら歌います。２節「期待もしなかった恐るべき業と共に降られれば／あなたの御前に山々は揺れ動く。」そして５節から「わたしたちは皆、汚れた者となり／正しい業もすべて汚れた着物のようになった。わたしたちは皆、枯れ葉のようになり／わたしたちの悪は風のように／わたしたちを運び去った。

あなたの御名を呼ぶ者はなくなり／奮い立ってあなたにすがろうとする者もない。あなたはわたしたちから御顔を隠し／わたしたちの悪のゆえに、力を奪われた。」このイザヤの語りは、見えない世界のことを語っているようでも、今を生きる私たちには妙にリアリティーをもって迫ってくるのではないでしょうか。この預言者は今のこの現実を昔から預言していたようであります。　それでもこの預言者は私たちに対して希望を語ってくれます。７節から「しかし、主よ、あなたは我らの父。わたしたちは粘土、あなたは陶工／わたしたちは皆、あなたの御手の業。どうか主が、激しく怒られることなく／いつまでも悪に心を留められることなく／あなたの民であるわたしたちすべてに／目を留めてくださるように。」

「目を留めてくださるように。」この言葉は孤独に苦しむ現代人が切実に求めている言葉でありましょう。「わたしに目を留めて下さい」と言って現代人は周りの人たちに助けを求めているようであります。乳幼児が母性愛溢れるお母さんを、身振りや泣き声によって振り向かせ助けを求めるように、今では大の大人も目に見える隣人に助けを求めるようになりました。それゆえマザコンやストカーなどの症状に苦しむ人たちが多いですが、実は真の救いは目に見えるところにはないのです。私たちのまことの救い主は、目に見える者も目に見えないものも造られ、丸ごと支配されている父なる神以外にはないのです。

昔の人たちは、この事実を信じ悟るのが、今よりたやすかったのかも知れません。何せ、この地上生涯の３分の１くらいの時間は真っ暗闇の中にいたわけですから、その見えない部分をも支配して下さる、父なる神に依り頼むことが必要でもあったことでしょう。

では、真夜中でもコンビニの明かりがこうこうと辺りを照らし、数多くの人たちが真夜中でも働いている、この現代社会の中で、私たちはどのようにして、まことの救い主を信じることが出来るようになるのでしょうか。そのことは最後に現れた、まことの預言者でもあるイエス様ご自身が、今日のマルコによる福音書の箇所で私たちに語ってくださっています。

イエス様はこの地上に降ってこられ、私たち人間そのものとなって、私たちの隣人となられました。そうして、この地上を歩まれたときに、手ずから私たちにそれぞれ仕事を割り当てて責任を持たせられたのでした。そしてイエス様は今の私たちにも「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。」と呼びかけられ、それぞれがイエス様に仕えることを勧めておられるのです。今日の聖書箇所では門番という仕事が語られています。門番とは見張りの人とも呼ばれ、外部からの敵の襲来をいち早く発見して、それを町の中の人たちに知らせるという仕事です。「目を覚ましておくように」と言いつけられた門番は、その仕事についている時には一睡もできず、ひたすら遥か遠方に目を凝らして、敵が近づくことを注視していたのでした。でも、門番と言う仕事は当然シフト制によって複数の人たちによって担われ、各々の仕事は無理が無いように配置されたのでありましょう。このように、イエス様はご自身が再び私たちの前に帰ってこられる時に、私たちがイエス様を忘れて寝込んでいないようにと、私たちを神に仕えるそれぞれの仕事に無理が無いように配置されておられるのです。

さて今の世の中で仕事と聞きますと、何か無理やり働かされるようなネガティブな印象が付きまとってしまいますが、最後にそのネガティブさを吹き飛ばすような御言葉をご紹介したいと思います。それはエレミヤ書の31章に記されています。エレミヤ書 31章 26節「ここで、わたしは目覚めて、見回した。それはわたしにとって、楽しい眠りであった。」つまり預言者エレミヤは楽しい夢を見たというのです。それはどんな夢かと言いますと、主なる神が帰って来る時に訪れる、新しいエルサレムの繁栄と喜びの夢であります。 13節「そのとき、おとめは喜び祝って踊り／若者も老人も共に踊る。わたしは彼らの嘆きを喜びに変え／彼らを慰め、悲しみに代えて喜び祝わせる。」

実は主イエスが私たち全てに課せられた仕事と言うのは、「目を覚ましていなさい」ということ、すなわち、私たちが寝ても覚めてもイエス様のことを忘れずに思っていて、楽しい夢を見て眠り、又、新たな目覚めを与えられるということなのです。

私たちはこのことをイエス様から与えられた基本的な務めとして、辛い時にも悲しい時にも、イエス様によって慰められながら、日々の生活を歩んでまいりたいと願います。

お祈りいたします

天の父なる神よ

あなたは、私たちをアドベントの時に導き、御子イエスが来られる時を待ち望むものとされました。どうか私たちに安らかな睡眠を与え、御子が顕れたその時に、新たに目を覚ますものとしてください。

クリスマスは、真っ暗闇のような辛くて悲しいどん底の時代に、御子がお生まれになって開始されました。闇の勢力は今も私たちに襲い掛かっていますが、闇を滅ぼす光の子でである、まことの救いの御子イエスキリストから私たちが離れないようにしてください。豊かな祝福と御守りの内に私たちがこの地上を喜び歌いながら歩めるようにしてください。

父と聖霊と